

1. 自然遺物の出土状況

(1) 各区の貝分布状態

発掘区は昭和54(1979)年度試掘時の区画を踏襲し、県道と平行に一边4mの方眼とした。貝層を採り上げる基準としては4m区画内をさらに次のように400箇所に分した。まず大区画同様に北から南に向かって20cm毎に1~20、西からa~tの記号を付け、例えばある20cm方眼を5B区3eと表示する。貝層は海拔8.5mを基準にして20cm四角の小区画を深さ5cm毎に土と共に採集した。しかし、調査後30年を経たのでそれぞれの袋に添付した紙片が消えたり、破れたものもあるため上から下まで良く残っている以下の区画について対象にする。

5D区 : 1a/3a/5a/4b/5b/3c/4c/5c/4d/4d/1e/3e/5e

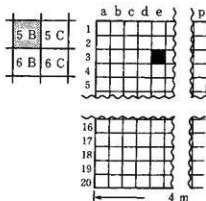
7B区 : 7e/9e/8f/17a/19a/17c/19e/18d/19c/3g/14-15g/17g/13h/11i/12-13i/14i/11j/13j/11k/13k/15k/7m/9m/11m/11n/7o/8o/9o/11o/17o/19o/20p/3q/5a/7a/9a/11a/13a/14a/15a/17a/19a/4r/10r/11r/12r/13r/15r/17r/18r/1s/3s/5s/7s/9s/11s/12s/13s/15s/16s/17s/19s/20s/1t/4t/6t/9t/10t/11t/18t/19t

7C区 : 1a/3a/5a/7a/10a/11a/13a/15a/16a/17a/18a/19a/7b/1c/3c/5c/7c/9c/11c/15c/16c/6d/7d/16d/3e/5c/7e/9e/11e/13e/11f/5g/6g/7g/9g/11g/13g/19g/5i/7i/8i/11i/13i/15i/17i/19i/7n/1o

8B区 : 1g/3g/1o/1r/1s/2s/8s/2t

8C区 : 1a/1c/3c/5c/7c/9c/17c/19c/19d/1e/3e/5e/7e/9e/15e/19e/20e/6f/7f/20f/1g/5g/7g/9g/15g/16g/17g/19g/7h/8h/17h/5i/7i/9i/11i/15i/17i/19i/3j/6j/15j/11/5l/7l/9l/19l/1c/1e/1g/3g/1o/1r/1s/2s/8s/2t

9C区 : 1c/1e/1f/1g/2e/3e/3c/5c/7d/5e/7e/9e/11e/2g/5g/7g/9g/11g/1i/3i/4i/5i/7i/9i/10i/11i



第168図貝採上げ模式図

掘出土状況一覽

	1a		3a		5a		4b		5b		3c		4c		5c		4d		1e		3e		5e	
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
88-100					Y11 Y15																			
100-105					X39/Ma 136/Ma 4																			
105-110					Y45 H1/Y54																			
110-115					Y35/Ma 2/Ma11 5																			
115-120					Y40 Y47/Ma 2/Ma11 3																			
120-125					Y40 Y47/Ma 2/Ma11 3																			
125-130					H2/Y60 H1/Y75 /Ma17 /Ma31																			
130-135					H2/Y60 H1/Y75 /Ma17 /Ma31																			
135-140					H2/Y60 H1/Y75 /Ma17 /Ma31																			
140-145					H2/Y60 H1/Y75 /Ma17 /Ma31																			

1c/1e区7日区に表記

	1a		3a		5a		4b		5b		3c		4c		5c		4d		1e		3e		5e	
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
88																								
85-70	ZL																							
70-75	T1				H1																			
75-80	(H2/Y60) H1/Y75				H7/Y32/S1 Ma2/D 3																			
80-85					H4/Y13/D H5/Y21/K1																			
85-90					H8/Y18 Ma1/Y12																			

左(左殿) H>Y ハマグリがヤマトシジミよりも多い。又はヤマトシジミがなく、ハマグリはある。
 右(右殿) H<Y ヤマトシジミがハマグリよりも多い。又はハマグリがなく、ヤマトシジミはある。
 HとYを比べ、5個以上の差があるもの。
 ※左にはその地も併記。

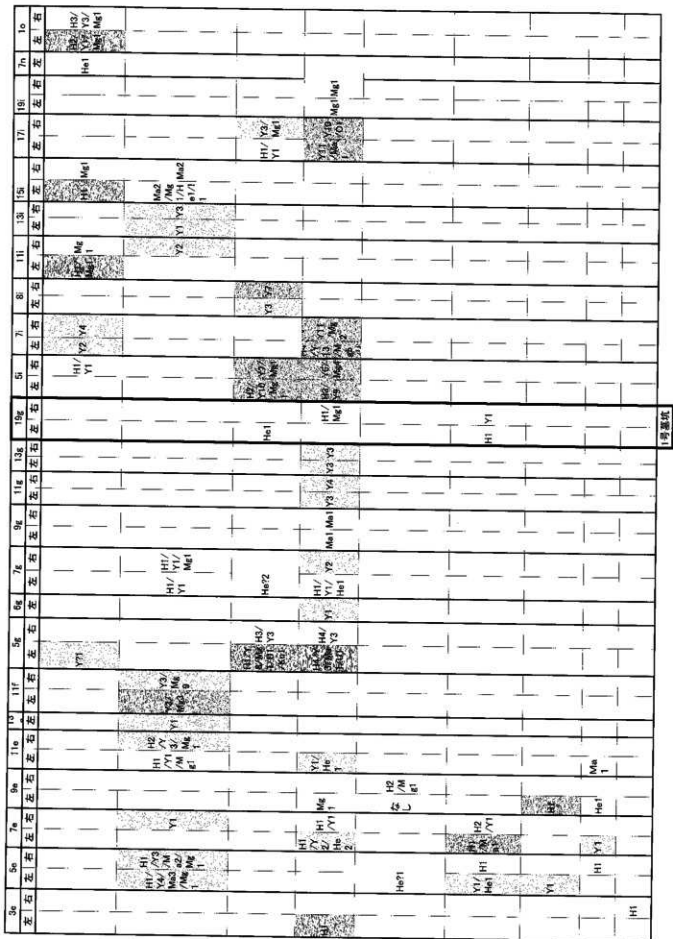
8.5m

76区	7e		8f		17a		17c		19a		17d		18d		8B1c		8B1e		19c		3g		14/15g		17g	
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
45-50	Ma2	Ma1																								
50-55	H3/H2/Ma	H3/Y2/H4/Y3/He1																								
55-60	Ma2	O1																								
60-65		H2/Ma5																								
65-70	H3	H1/Ma																								
70-75	H2	U1																								
75-80	Y1	H1/Y1																								
80-85	H2	H4/Y2																								
85-90	Ma2	H1																								
90-95																										
95-100																										
100-105																										
105-110																										

Ma (マシジミ)・Y (ヤマトシジミ)・Mg (マガキ)・H (ハマグリ)・O (オキシジミ)・S (シオフキ)・K (カキ)・U (ウシナ)・F (ホソオカチヨウジ)・Ku (クチケレガイモドキ)・I (イボキヤコ)・Ki (キセルガイ)・Kn (カウナ)・T (ツバガイ)・A (アダムスタマガイ)・Ag (アサリ)・Ar (アラムシロ)・M (ムシオキガイ)・Ib (イボニシ)・Ot (オカチヨウジ)・T (トウガタガイ)・Kr (クロシジミシロガイ)・B (バ)・N (ナガニ)

10r	11r		12r	13r		15r	17r	18r	1s		3s		5s		9s		11s		12s		13s		15s	
	左	右		左	右				左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右

70	1a	3a	5a	7a	10a	11a	13a	15a	16a	17a	18a	19a	7b	10c	3c	5c	7c	9c	11c	15c	16c	6d	7d	16d
65-70		HI	HI /Y1		HI	HI /Y1		HI /Y1																(H1) H2 /Y2 Y4 /Mg1 Mg1 0
70-75			Mg1 Y1 /Y2 5		HI /H2 /Y2 Y1 /Mg1 Mg1	HI /H2 /Y2 Y1 /Mg1 Mg1		H2 /H3 /Y3 Mg1 Mg1						HI /H1 /Y2 12		7		He1 Mg1 Y1						
75-80					HI /Y2 Y1 /Mg1	HI /Y2 Y1 /Mg1		H2 /H3 /Y3 Mg1 Mg1																
80-85		HI /H2 /Y2 /Y1 /Mg1	HI /Y1 /Mg1		HI /H2 /Y2 Y1 /Mg1	HI /H2 /Y2 Y1 /Mg1		H2 /H3 /Y3 Mg1 Mg1																
85-90					HI /Y4 /Y3 /Mg1 Mg1	HI /Y4 /Y3 /Mg1 Mg1		H2 /H3 /Y3 Mg1 Mg1																
90-95					HI /H1 /H2 /Y2 /Y1 /Mg1	HI /H1 /H2 /Y2 /Y1 /Mg1		H2 /H3 /Y3 Mg1 Mg1																
95-100					HI /H1 /H2 /Y2 /Y1 /Mg1	HI /H1 /H2 /Y2 /Y1 /Mg1		H2 /H3 /Y3 Mg1 Mg1																
100-105					HI /H1 /H2 /Y2 /Y1 /Mg1	HI /H1 /H2 /Y2 /Y1 /Mg1		H2 /H3 /Y3 Mg1 Mg1																
105-110					HI /H1 /H2 /Y2 /Y1 /Mg1	HI /H1 /H2 /Y2 /Y1 /Mg1		H2 /H3 /Y3 Mg1 Mg1																



1号基岩

	1a	1o	3o	5o	7c	9c	17c	19c	19d	1e	3b	5a	7e	9a	15a	
80	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
60				HL/Y9 / H2/Y4 Ma1/Y9 / H2/Y4 Ma1/Y9 / H2/Y4												
65						ZL 1 Mg										
65				H8/Y12 / H2/Y6 Ma1/D/H4 Ma1/D/H4												
70																
70																
75				H1 Y1/Ma1												
75-80				H8/Y4/ Ma3	H1											
80-85				H5/Y8 / H2/Y1 Ma1	H1/Ma1											
85																
85-90																
90-95																
95-100																
100-105																
105-110																
110-115																
115-120																

Pit

8h		7h		5		7i		9		11i		15i		17i		18i		3i		6		15j		11		5i		7i		III		I81					
左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右						
11i Ma2																																					
				±L H2																																	

BO	1e	1f	1g	2a	3a	3b	5c	7d	5e	7e	9e	11e
60-65	H3/Y4/Ma6											
65-70	H4		H2/Y3									
70-75	H2/Y1		H2/Y1									
75-80			H4/Y9									
80-85	H1/Y2/Ma2 /U2/Ma2 Ma4											
85-90	H1/Y4			H1	H3/Y U2	H3/Y U2	H1/Y5 /Ma8 /Ma12	Y1/Y3 Y1 Y2	Y1/ He 1		Ma1 Ma3	
90-95	H2/Y2/S1 Y3	H13/Y15/U1 H12/Y9										
95-100												
100-105	Y4	H1/Y2/Ma3/ U1/He1			H2/Y3/Ma4	H1/Y3/ Ma3				Y1		
105-110	H1/Y4	H5/Y28/Ma2 /S1/U2/He1 Ma4/Ma2	H1/Y24 3	H1/Y3 /Ma1 Ma4	H1/Y3 /Ma1 Ma4	H1/Y3 /Ma1 Ma4						
110-115	Y2	H2/S28/S1/ S281	H4/Y7									
115-120	He/U1 Y2	H1/Y4/Ma3/ He1	H7/Y3 /Ma1 Ma3	H8/Y12-11 H2/Y12	H1/Y4/MaB/ O1	H3/Y4/ Ma3						
120-125					Y1	Y1						

3 号 土 坑

貝の時期別分布について（表のまとめ）

出土した貝殻について、放射性炭素による年代測定8点を（株）パレオ・ラボに依頼し以下の結果を得た。測定結果・貝殻の出上場所とその深度は以下の通りである。なお、深度は標高8.5mを基準としている。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-15032	調査区:7B区s15:深度65~70cm(810327)	試料の種類:貝(汽水産)(ヤマトシジミ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N
PLD-15033	調査区:7B区s15:深度75~80cm(810411)	試料の種類:貝(汽水産)(ヤマトシジミ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N
PLD-15034	調査区:7B区s15:深度85~90cm(810403)	試料の種類:貝(海水産)(ハマグリ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N
PLD-15035	調査区:7B区s15:深度95~100cm(810514)	試料の種類:貝(海水産)(ハマグリ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N
PLD-15036	調査区:7C区d16:深度65~70cm	試料の種類:貝(海水産)(マガキ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N
PLD-15037	調査区:7C区a15:深度75~80cm(810605)	試料の種類:貝(海水産)(ハマグリ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N
PLD-15038	調査区:5D区e5:深度115~120cm(810314)	試料の種類:貝(汽水産)(ヤマトシジミ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N
PLD-15039	調査区:5D区e5:深度115~120cm(810314)	試料の種類:貝(汽水産)(ヤマトシジミ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N

表2 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を暦年年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-15032	-7.65 \pm 0.12	5067 \pm 22	5065 \pm 20	Marine09: 3517BC (58.1%) 3436BC34 21BC (10.1%) 3400BC	Marine09: 3562BC (95.4%) 3366BC
				Intcal09: 3943BC (22.2%) 3911BC38 78BC (19.5%) 3854BC3847 BC (10.3%) 3832BC3825BC (16.2%) 3804BC	Intcal09: 3962BC (35.7%) 3891BC38 85BC (59.7%) 3797BC
PLD-15033	-7.35 \pm 0.12	5041 \pm 22	5040 \pm 20	Marine09: 3489BC (61.3%) 3401BC 3394BC (6.9%) 3384BC	Marine09: 3509BC (95.4%) 3360BC
				Intcal09: 3937BC (53.6%) 3871BC38 11BC (14.6%) 3791BC	Intcal09: 3946BC (95.4%) 3776BC
PLD-15034	1.13 \pm 0.15	5013 \pm 24	5015 \pm 25	Marine09: 3457BC (88.2%) 3364BC	Marine09: 3492BC (95.4%) 3346BC
PLD-15035	-0.12 \pm 0.15	5076 \pm 22	5075 \pm 20	Marine09: 3530BC (61.1%) 3437BC 3420BC (7.1%) 3400BC	Marine09: 3581BC (95.4%) 3372BC
PLD-15036	-1.78 \pm 0.22	4851 \pm 25	4850 \pm 25	Marine09: 3295BC (61.4%) 3164BC 3144BC (3.8%) 3135BC	Marine09: 3317BC (95.4%) 3093BC
PLD-15037	-1.19 \pm 0.11	4996 \pm 23	4995 \pm 25	Marine09: 3442BC (68.2%) 3350BC	Marine09: 3483BC (95.4%) 3369BC

PLD-15038	-10.12 ± 0.16	5798 ± 24	5800 ± 25	Marine09: 4311BC (68. 2%) 4248BC	Marine09: 4331BC (95. 4%) 4220BC
				Tntcal09: 4704BC (44. 6%) 4651BC 4642BC (23. 7%) 4616BC	Tntcal09: 4718BC (92. 8%) 4582BC 4568BC (2. 6%) 4555BC
PLD-15039	-8.70 ± 0.13	5832 ± 24	5830 ± 25	Marine09: 4331BC (68. 2%) 4269BC	Marine09: 4325BC (95. 4%) 4236BC
				Tntcal09: 4764BC (2. 0%) 4758BC 4727BC (57. 8%) 4682BC 4633BC (7. 8%) 4620BC	Tntcal09: 4781BC (83. 3%) 4650BC 4644BC (12. 1%) 4613BC

各資料について説明する。表中、暦年較正年代とは測定された年代を、年輪により年代の分かっている樹木について定された炭素年代で補正したもの。測定値だけでは実態とずれた値がでるために修正しているわけである。

資料1: 7C区 a15 では標高 7.75m ~ 7.70m で出土したハマグリを測定した (PLD-15037)。暦年較正年代は 4996 ± 23 年前である。これと同時に採り上げた 5cm 厚さ内の貝殻構成は、ハマグリ 22・ヤマトシジミ 38・ウミユナ 3・オキシジミ 3・マガキ 4 である。

資料2: 7C区 16d では標高 7.85m ~ 7.80m で出土したマガキを測定した (PLD-15036)。暦年較正年代は 4851 ± 25 年前である。これと同時に採り上げた 5cm 厚さ内の貝殻構成はハマグリ 9・ヤマトシジミ 19・マガキ 13・シオフキ 1 であった。

資料3: 7B区 15s では上から下に相互に 5cm の空白を置いて出土した 4 点を測定した。PLD-15032 は標高 7.85m ~ 7.80m ままでに出土したヤマトシジミである。暦年較正年代は 5067 ± 22 年前である。ここではハマグリ 7・ヤマトシジミ 21 の構成である。

資料4: 7B区 15s の PLD-15033 は標高 7.75m ~ 7.70m で出土したヤマトシジミである。暦年較正年代は 5041 ± 22 年前である。

資料5: 7B区 15s の PLD-15034 は標高 7.65m ~ 7.60m で出土したハマグリである。暦年較正年代は 5013 ± 24 年前である。ここではハマグリ 4・ヤマトシジミ 18・He1・マガキ 3 の構成である。

資料6: 7B区 15s の PLD-15035 は標高 7.65m ~ 7.60m で出土したハマグリである。暦年較正年代は 5076 ± 22 年前である。ここではヤマトシジミ 2 のみの構成である。

資料7: 5D区 e5 では 2 点を測定した。標高 7.35m ~ 7.30m ままでに出土したヤマトシジミである。この部分の構成はヤマトシジミ 2 点のみであるが、下位には厚さ 2cm の貝層が存在する場所である。まず PLD-15038 の暦年較正年代は 5798 ± 24 年前である。

資料8: 5D区 e5 のもう 1 点ヤマトシジミ、PLD-15039 で暦年較正年代は 5832 ± 24 年前である。

2. 獣骨類の同定

横尾貝塚の動物遺体

西本豊弘（国立歴史民俗博物館教授）

横尾貝塚の1982年度の発掘調査では大量の動物遺体が出土した。そのうち、5・6・7・8区出土の動物遺体の内容を報告する。これらの地区は縄文時代前期と中期の包含層が主に分布するがその時期区分は行っていない。また貝類については発掘された高橋信武氏が分類されて別項目で報告されているので、ここでは哺乳類を中心に説明する。

今回分類した資料は約2800点であり、そのうち部位を同定した資料は約300点である。骨質の保存状況はよいが小さく壊れているものが多いので、四肢骨で部位と種を同定できる資料が少なかった。一方、顎骨が壊れており遊離歯が多かった。これらの破片以外に人骨の破片が多いことから、貝層が形成された後に縄文人の埋葬などで縄文時代に貝層が攪乱された頻度が高く、そのため獣骨が小さく割れたのではないかと推測される。動物骨の出土内容は表に示した通りであり、それらについて簡単に説明する。なお、本報告をまとめるにあたり、西本研究室の金ホンソク・住田雅和・澁形早季子の協力を得たことに感謝します。

1. 魚類・鳥類

魚骨で部位と種名が判明したものを表に示した。アオザメタイプの歯が1点と大型のサメ類の椎骨3点がみられた。タイ類は最も多く出土しており、よく成育したクロダイが主体である。その他にマダイ・ヘダイも見られた。ボラ類の椎骨と大型のフグの歯板も出土している。これらの資料は発掘時に出土地点を記録されて採集されたものであり、その他に貝層とともに小さな魚骨片も多く採集されている。それらは小さく割れた破片であり、今回は分類を行っていない。それらの中にはイワシ類の椎骨も含まれていた。鳥類は、オオハムと思われる中型のアビ類の手足骨が1点と種不明の四肢骨破片が数点見られただけである。

表1 魚類・鳥類出土量

種名	部位	左右	発掘区			
			7B	7C	8B	8C
アオザメ類	歯				1	
サメ	椎骨					
クロダイ	前上顎骨	右			1	3
		左				1
	上顎骨	右				1
		左		1	1	1
	歯骨	右	1			
		左	1			
タイ	関節骨	右				1
	主髌蓋骨	右				1
	棘					1
マダイ	歯骨	左				1
ヘダイ	前上顎骨					1
ボラ	椎骨		1			
フグ	歯板					3
アビ	手足骨右		1			
鳥	骨片		1			

2. 哺乳類

哺乳類はシカとイノシシが主体であり、その他にニホンザル・タヌキ・アナグマ・ノウサギ・イルカ類・クジラ類がごく少量見られただけである。シカは部位を同定した資料は136点で7B区と8C区で多く出土している。四肢骨では若獣と成獣しかみられなかったが、上下顎骨でみると幼獣・若獣・成獣のすべての年齢段階のものが含まれていた。イノシシは、部位を同定した資料は122点であり、シカと同様に7B区と8C区で出土量が多い。上下顎骨からみて、幼獣・若獣・成獣のすべての年齢が含まれている。この遺跡のシカとイノシシは、割れているものが多いので計測できる資料が少ないが、シカの上腕骨遠位部幅(8C区)46.0mm、トウ骨近位部幅(8C区)45.6mm、イノシシの下顎第3後臼歯(8C区)の長さ38.9mm、上腕骨遠位部幅(7B区)43.8mmのように、いずれもかなり大きいことが特徴である。おそらく縄文時代中期の関東地方のシカ・イノシシとほぼ同大であろう。

表2 哺乳類出土量

種名	部位	左右	残存部位	発掘区			
				7B	7C	8B	8C
サル	尺骨	左					1
	大腿骨	右	近位部♀	1			1
ウサギ		左	遠位部	1			
アナグマ	下顎骨	左	(12~M2)	1			
タヌキ	上顎骨	右	(P4M12)	1			1
	上顎遊離歯	右	M2				
			犬歯		1		1
	下顎骨						1
	下顎遊離歯	左	M1				1
	上腕骨	右	遠位部	1			
イルカ	歯			1			
	尾椎						1
クジラ類	椎骨						1

表3 シカ上・下顎骨及び遊離歯出土内容

部位	左右	残存部位	年齢	発掘区
上顎骨	右	(M12)	若獣	7B
	左	(m 234)	幼獣	8C
上顎遊離歯	右	M2	若獣	7B
	左	M3	若獣	7B
		M1		7B
下顎骨	右	(XX m 4 X)	幼獣	7B
		(m 4 M1)	幼獣	7B
		(M12)	成獣	7B
		(M23)	成獣	8C
		(M 3)	成獣	8C

部位	左右	残存部位	年齢	発掘区
	左	(M 3)	成獣	7B
		(Xm34M12)	若獣	7B
		(P 4)	若獣	8B
		(M123)	成獣	7B
		(P234X)	成獣	7B
下顎遊離骨	右	m 3	幼獣	7B
		I 1	成獣	7B
		I 1	成獣	8C
		M 2	成獣	7B
		M 2	成獣	7B
		M 3	成獣	8C
		M 1		7B
		M 1		8C
		M 2		7C
		左	I 1	成獣

注 0 は顎骨の残存範囲を示す。I: 切歯 C: 犬歯 P: 前臼歯 M: 臼歯 X: 脱落歯小文字は乳歯を示す。

小型獣は、サルの大腿骨の右側が2点出土している。成獣であり、大きさから見て雌獣と思われる。その他にタヌキが少量とアナグマとウサギが各1点見られた。イルカ類は比較的大きなイルカの歯1点と尾椎1点である。クジラ類は椎骨の破片であり大きさは分からない。

表4 イノシシ上・下顎骨及び遊離骨出土内容

部位	左右	残存部位	年齢	発掘区
側頭骨	右			8B
				8C
	左			7B
頭蓋骨片				7B
上顎骨	右	(X m 4 M 1)	幼獣	7B
		(m 3 4 M 1)	幼獣	7B
		(M 1 2 3)	若獣	8C
		(P 3 4 M 1)	成獣	7C
	左	(M 1)	幼獣	8C
		(X m 4)	幼獣	8C
	(M 3)	若獣	8C	
上顎遊離骨	右	I 3	成獣	7C
	左	i 3	幼獣	7B
		P 2	成獣	8C
		P 3	成獣	7B
		M 2	成獣	8C
		M 3	成獣	7C

部位	左右	残存部位	年齢	発掘区
下顎骨	右	(M 1 2 3)	成獣	5D
		(XM 3)	成獣	8C
	左	(x P 4 M 1 2)	若獣	8C
		(x M 1 x)	若獣	8C
		(M 1 2)	成獣	7B
下顎遊離骨	右	i 2	幼獣	6D
		i 2	幼獣	6C II層最下層
		i 2	幼獣	7B
		i 2	幼獣	5D
		m 4	幼獣	8C
		♀ C	若獣	5D
		♂ C	若獣	7C
		I 1 2	成獣	5D
		I 2	成獣	7B
		I 3	成獣	8C
		♂ C	成獣	8C
		♂ C	成獣	8C
		M 2 3	成獣	7C
		M 3	成獣	7C
		♂ C		8C
		左	i 2	幼獣
	i 3		幼獣	5D
	m 4		幼獣	5D
	I 2		若獣	7B
	I 2		若獣	7B
	M 2		若獣	7C
	I 1 2		成獣	5D
	I 1		成獣	7C
	I 2		成獣	8C
	I 2		老獣	8C
	I 3		成獣	5D
	I 3		成獣	8C
	M 2		成獣	8C
	♂ C		成獣	8C
	♂ C		成獣	8C
	♂ C			7B
	♂ C			7B
	不明	i 2	幼獣	7B
m 2		幼獣	8C	
M 3		若獣	7C	

部位	左右	残存部位	年齢	発掘区
		C		8C

注 () は顎骨の残存範囲を示す。I: 切歯 C: 犬歯 P: 前臼歯 M: 臼歯 X: 脱臼歯小文字は乳歯を示す。

表5 シカの出土量

部位	左右	残存部位	発掘区					
			6C	7B	7C	8B	8C	8D
頭蓋骨							1	
		後頭顆				1		
		破片		2				
角座	左				1			
	右			1			1	
角		破片		2	5		3	
上顎骨	左						1	
	右			1				
上顎遊離骨	左			1				
	右			2				
下顎骨	左			3		1		
	右			4			2	
下顎遊離骨	左						1	
	右			5	1		3	
頸椎				1				
肩胛骨	左			3		1		
	右			2		1	1	
上腕骨	左 遠位部			2	2	1	1	
	右 遠位部	1		5	1	1	6	
橈骨	左 遠位部			1				
	右 近位部			3	2	1		
尺骨	左			1		1		
	右			2	1			
寛骨	左						2	
	右 近位部						1	1
大腿骨	左 遠位部			1				
	近位部			1			2	
脛骨	左 遠位部				1		1	
	右 遠位部			1			1	
踵骨	左			2	1		2	
	右			2	1		2	
	右			2		1	1	
中手骨		破片		1				

部位	左右	残存部位	発掘区						
			6C	7B	7C	8B	8C	8D	
中足骨	右	近位部		1					
		破片		2					
中手中足骨		破片		1			7		
基節骨				2		1	1		
中節骨				1					
末節骨				3					
頸椎				2					
腰椎				1					
椎骨				2					
計			1	66	16	11	41	1	

注 出土量は若獣と成獣を合計したものの。

表6 イノシシの出土量

部位	左右	残存部位	発掘区									
			不明	5D	6C	6D	7B	7C	8B	8C	8D	
側頭骨	左						1					
	右								1	1		
頭蓋骨片							2			1		
上顎骨	左									3		
	右						2	1		1		
上顎遊離	左						2	2		2		
	右							1				
下顎骨	右		1								1	
	左						1				2	
		下顎連合部					1	1				
下顎遊離歯	左		5				4	2		6		
	右		3	1	1	2	3			5		
		不明					1	1		2		
環椎											2	
肩胛骨	左						2	2		2		
	右						3	1		1		
上腕骨	左	遠位部					3	1		2		
	右	遠位部	1				7	2		1	1	
尺骨	左										2	
	右										1	
橈骨	左	近位部					1					
	右	遠位部					1					
		近位部									1	
寛骨	左							1	1			

部位	左右	残存部位	発掘区									
			不明	5D	6C	6D	7B	7C	8B	8C	8D	
		破片					1					
大腿骨	左	遠位部							1			
脛骨	左					1		1				
		中間部				1						
	右	遠位部					1	1			1	
腓骨						2					1	
中手中足骨		遠位部									2	
中節骨						1		1			1	
		近位部										
末節骨						1			1		3	
蹠骨	右									1	2	
	左					1					1	
距骨	左										1	
	右					1		2				
頰椎						1						
胸椎						2						
頸椎				1								
計			1	10	1	2	46	24	4	48	1	

注 出土量は若獣と成獣を合計したもの。

まとめ

横尾貝塚出土の動物遺体はシカとイノシシが主体である。そして、シカとイノシシの大きさが現代のものよりかなり大きいことが特徴である。魚類はクロダイ主体で、内湾の魚類を対象に漁労活動が行われていたと推測される。これらの資料は、九州地方の縄文時代前期・中期の資料として貴重なものと言える。



写真2 イノシシとシカ

1~4. イノシシ 5~12. ニホンジカ

1. 下顎骨 2・6. 肩甲骨 3・7. 踵骨 4・8. 上腕骨 5. 頭蓋骨 9. 橈骨 10. 尺骨 11. 脛骨
12. 大腿骨 (1・3・5・6・10は右側、他は左側)

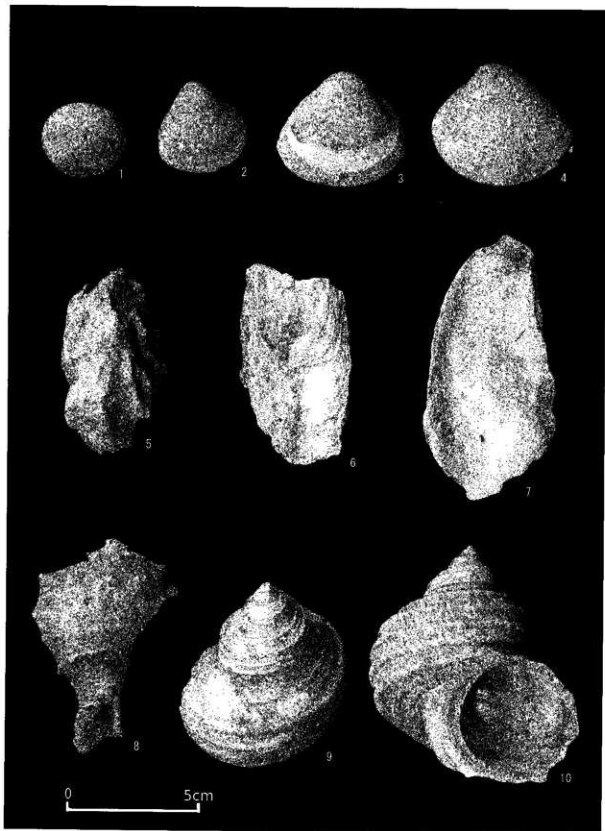


写真1 貝類

1. ツメタガイ 2. ヤマトシジミ 3. シオフキガイ 4. ハマグリ 5~7. マガキ (5. 歯左側。6・7は右側) 8. アカニシ 9・10. チョウセンサザエ

3. 横尾貝塚における貝類分析

小池 裕子 (当時 東京大学総合研究資料館)

大分県大分市大字横尾に所在する横尾貝塚には、長径 20 m にわたって貝殻の撒布が認められ、1980—81 年の発掘調査の結果、厚さ約 30 cm の未攪乱の貝層で構成されていることがわかった。加えてピット内にも 4 カ所にわたり貝層の堆積が検出された。これらの貝層を構成する貝類は、前期の貝層の貝類はヤマトシジミ主体、中期の貝層はハマグリ主体となる傾向があるなど、横尾貝塚をとりまいてきた環境が少しずつ変化していることを示唆している。このような環境変化の影響は、貝殻の成長速度にも表れると考えられている。ここでは成長速度の分析の予報として 7C 区と 6C 区から出土したハマグリ成長の成長をみてみよう。

〈ハマグリ成長速度〉

本遺跡出土のハマグリはあまり保存がよくなく、特に殻頂附近の外層が溶脱し、最初の冬輪が残存していない個体が多かった。成長速度が調べられた 9 個体の中で、早い時期の冬輪が検出された例 (7C-30) では第 1 冬輪が殻高 6 mm、第 2 冬輪が殻輪 16.2 mm であった。従って他の個体の最初の冬輪として検出された殻輪 13~17 mm の冬輪は、2 番目の冬輪に相当するものと思われる。その後第 1 冬輪から第 3 冬輪までの成長は非常に早く、第 3 冬輪ではすでに 25 mm から 31 mm に達する。第 3 冬輪以降成長速度は落ち、第 4 冬輪で殻高

33~37 mm、第 5 冬輪で 42~45 mm であった。一方 Walford の定差式といわれる方法を用いて満年齢における平均殻高を算定すると (図 1)、満 1 年で殻高 15.5 mm、満 2 年で殻高 27.7 mm と初期成長はかなり速いが、満 3 年では 37.5 mm、満 4 年では 45.4 mm、満 5 年では 51.6 mm と成長速度が遅くなっている。

横尾貝塚跡のハマグリ成長値を現生ハマグリとそれと比較してみよう。県下の現生標本がまだ得られていないので、とりあえず博多湾奈多海岸産のハマグリを例にとる。Walford 法に基づく平均成長速度は、満 1 年で殻高 20.3 mm、満 2 年で 32.6 mm とかなり速く、満 5 年で 47.3 mm まで成長する。従って横尾貝塚のハマグリ成長速度は現生博多湾のものにほぼ匹敵すると言えよう。

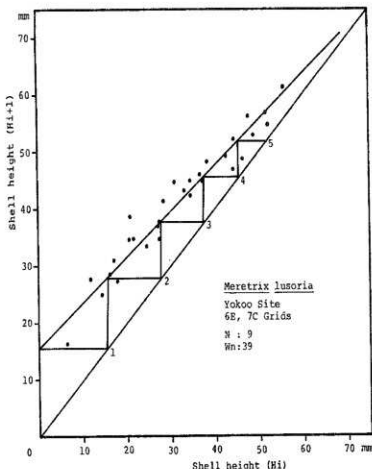


図1: 横尾貝塚6E区・7C区から出土したハマグリ成長速度 (数字 1-2-3 は満年の殻高成長値を示す)

〈季節推定〉

季節推定のためのサンプリングは1981年の2号ピット、7C区西壁、9C区東壁、5D区南壁および6E区西壁で行われた。そのうち6E区東壁の分析を終えたので予報として報告したい。

6E区西壁セクションの貝層

分析用貝殻のサンプリング方法は、まず堆積状況から判断して未攪乱と思われる貝層部分を対象に選んだ。セクション図(図2)に示すように、貝層セクションに表れた貝すべてについて貝殻の堆積の方向がわかるように貝殻自体をスケッチした。サンプリングは竹ベラで注意深く1点1点取りあげ、セクション図にその貝の番号を記録した。6E区西壁ではヤマトシジミ198個、ハマグリ18個の計216個の貝が取り上げられた。この中には貝縁が破損しているもの、チョーク化がかなり進行しているものなど保存の悪い貝も含まれていた。混貝は分析に耐えうる保存の良いヤマトシジミ66点を選び、常法によって採取季節を推定した。

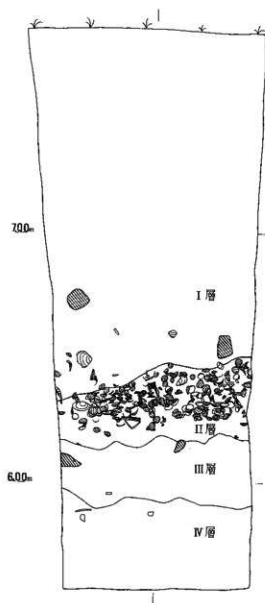
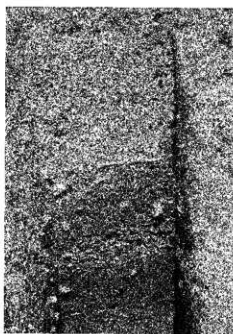


図2: 6E区南壁



- I層……攪乱層。貝層直上まで二次的な堆積層。
- II層……上部に貝層をのせた黄褐色土層。アカホヤ火山灰の小塊(網目)が貝層下部に有り、層全体がアカホヤの混入により黄味を帯びている。竈B式土器を包含。
- III層……黒褐色粘質土層。早期包含層。
- IV層……暗い赤褐色の粘質土層。上部に早期の遺物が包含される。

分析された66点の季節組成(図3)は、春の後半が多く、全体の約半数を占めた。次いで夏の前半・後半が多かった。貝の示す採取季節が貝層セクションでどのように分布しているかを調べてみると(図4)、6E区西壁の貝層は、貝層中の上方は貝の密度が高く比較的保存が良かったが、貝層の下面近くになると貝の密度が低く、分析可能な個体が少なかった。

この貝層の季節組成の中で主体を占めた春の後半に採取された貝(冬軸中心から60~90日)は、西壁の向かって左上方に密集している。同時期の採取季節をもつ貝が集中している箇所を探してみると、セクション中央部に160~190日前後に採られた貝が多く出現

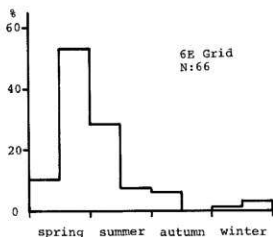
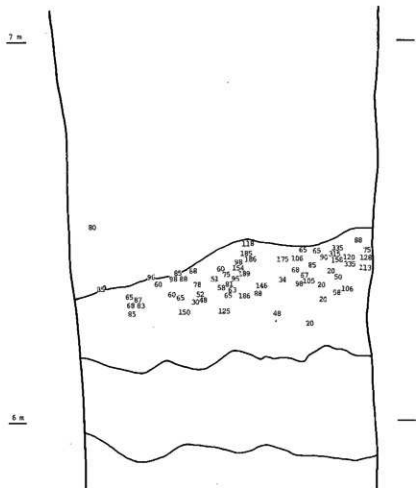


図3: 6E区西壁からサンプリングされたヤマトシジミの採取季節



6E区南壁の貝採り上げ番号

し、右手下面には春の前半に採られた貝、右手上方近くには冬の300日以後に採られた貝が密集しているのが読みとれる。このように6E区西壁セクションに示された貝の採取季節の分布はかなり複雑な様相を示す。ここに示された推定の季節の集中が層位的にどのような位置関係にあるのか、今後分析数を増やしながら検討を続けたい。

第5章 まとめ

古墳時代・弥生時代等について

縄文時代包含層の上部に弥生時代・古墳時代遺物包含層が重複し、礫が一面に散乱し数カ所にまとまりが認められた。弥生時代の遺物は中期後半から後期前葉のものであった。隣接する大分市調査区では包含層出土の下城式壺1点が報告されているだけであり、弥生時代の中心は貝塚付近であろう。また、大分市調査区では古墳時代遺物の報告が見られないのでこの時期も貝塚付近でこじんまりと短期間生活した場面があったようである。古墳前期の竈穴住居跡1基が5・6区において縄文時代の層に切り込んで掘られていたが、完結せず埋め戻して調査を終えたので、今後調査が可能である。

遺物について

調査中の観察では貝層からは前期・中期の遺物が主に出土し、後期は大部分が貝層よりも上の土層から出土する状態であった。遺物が年代順に堆積しているのかどうかを確認するため作成したのが第1図である。時期別の土器出土状態投影見通し図を作成したものを集成した。前期の轟式、中期の船元式・阿高式、後期の西和田式・中津式について報告の部分で平面図と見通し図を示した。

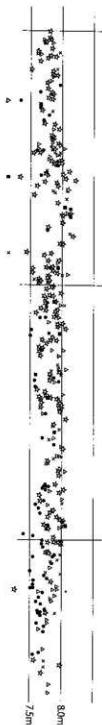
これらの見通し図を同じ面に投影すると前期の轟式土器(●)が最下層にあり、その上位に中期の船元式土器(☆)が分布することが分かる。また、後期初頭の中津式土器(×)と西和田式土器(△)の分布状態を船元式と比べると中津式と西和田式が相対的に高い位置から出土する状況が浮かび上がる。中期後半の阿高式土器は数量が少ないため明瞭ではないが、船元式分布帯の上部にあるものが多い。一部は貝層上部に投影できる。しかし、異なる時期の遺物が上下に移動して同一面に混在していることも否定出来ない。当時の人々による攪乱や後世の樹根・小動物による移動などで本来の整合的な堆積が乱されたとみられる。

縄文時代早期の土器

早期の遺物包含層を5D区のトレンチ部分で確認した。この部分では土器は見られなかったが、焼けた礫の分布が認められた。早期末としては轟1式(第51図1)が1点だけ出土した。この段階かと思われる平底の轟式が大分市教委の調査でも報告されており、調査範囲を広げれば周辺や下層にこの型式土器が存在するとみられる

縄文時代前期の土器

前期は貝層下部とその下位の土層から出土した。第46～56図は前期の轟4式・5式土器である。外面に粘土紐を貼り付け紋様としたものが多い。上下の貼付け突帯の間に丸く回きをもつのは相対的に古く位置づけられ(轟4式)、突帯の間が平坦になり、さらに時期が新しくなるにつれ突帯の数が減少する傾向のある土器である。同時に突帯の断面が丸みを帯びてゆく。轟式以外に九州系の前期末土器では曾畑式土器が数点みられる。列点土器としたものは轟4式・5式前後に九州東北部から瀬戸内西部を中心に分布する土器である。山口県の月崎下層式や彦崎Z1式、羽島下層II式に類似する。前期後半の近畿地方の大蔵山式土器が出土しているのは九州では珍しい存在である。引き続く前期末の瀬戸内の里木1式土器がみられる。



第1図 時期別土器投影図

縄文時代中期の土器

まず、近畿地方由来の鷹島式土器が数点みられる。次いで中期前半の主体的土器は西日本に広く分布した船元式土器の第1・第3・第4様式土器である。本文中でも触れたが円形刺突紋を一要素とする第2様式土器が1点も出土しておらず、わずかに20㎝程度離れたエゴノクテ遺跡では逆にある程度みられること、隣接する大分市調査区では船元式土器がまったくみられないこと等から、船元第2様式の時期には横尾貝塚は無人だったと考えられる。

縄文時代中期には南九州に独自の土器文化が併存していたが、横尾貝塚ではそれらは1点も出土しておらず、この時期の大分県は瀬戸内七器圏に入っていたことになる。かつては、阿高式土器が中期の大半の時期と地域を占めると誤解されていたが、船元式土器が九州北部から南部のかなりの範囲に分布したと考えられるようになった。横尾貝塚では前期の大半が九州系土器であったのが、前期末から中期前半・中頃までは瀬戸内の土器が主体的な存在であったことになる。

しかし、船元式土器が次第に在地化した状況が底部の特徴から窺える。鷹島式から船元式初期（第1様式）には底面が五角形の土器が存在するのが一般的で横尾貝塚でも出土しているが、別にコブ状の突起がおそらく五個つく底部も出土している。5突起底部と呼びたい。類例は九州各地に存在するのでこの時期の土器に共存するのか船元式における底部の状況を検対してみると、五角形底部は鷹島式から船元第3様式（Ⅱ式）まで存在すると共に5突起底部が船元Ⅱ式段階にのみ存在することが分かる（第1表）。他遺跡では裏返して見ると底の輪郭が五角形になる例があり、五角形底部から5突起底部が派生したことを示している。

5突起底部が九州以外には存在するのいくつかの遺跡を調べてみた。愛媛県江口貝塚は前期から中期全般の土器が少数出土し五角形底部土器が1点報告されているだけであるものの、5突起底部やそれに近い土器片も出土していない（宮本一夫他1991「江口遺跡第1次調査」愛媛大学法文学部考古学研究所報告第1冊 愛媛大学法文学部考古学研究室）。

島根県陰田第7遺跡では大蔵山式・鷹島式・船元Ⅰ～Ⅲ式があるが底部は五角形5点であり、その他は平円形が多く、高台状底部や丸底が少数みられる（植田真他1984「陰田」米子市教育委員会）。里木Ⅰ式、続く船元式全期間から次の里木Ⅱ・Ⅲ式が多量出土した岡山県里木貝塚には5突起底部は存在しない（間壁忠彦1971「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号財団法人倉敷考古館）。徳島県荒川遺跡ではⅡ～Ⅳ式等が出土しているが平円のみである（大北和美他2005「荒川遺跡」徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第61集徳島県教育委員会）。

和歌山県鷹島では鷹島式は五角形底部だけである。なお、同書で巽三郎氏が「九州地方の中期の竹崎式も、鷹島式との関連を考えさせる土器である。これは、底の周辺に突脚を4～5個つけたものである」として、底部の特徴を指摘している（巽三郎・中村貞史1969「鷹島」南紀考古同好会）。

栗津湖底第3貝塚は第2様式（※様式は文末表参照）から第3様式の土器が層位的に出土しているが、底部は一般的な平底の円形であり五角形や突起をなすものはみられない。従ってこの地域では五角形底部はかつて存在したとしても第1様式内で終えたいし（瀬戸口眞司他1997「栗津湖底第3貝塚」財団法人滋賀県文化財保護協会）。

岡山県備前市長瀬手遺跡では中期末の土坑から船元Ⅳ式ないし里木Ⅱ式も出土していて、突起底部1点が共存している（船元式底部集成図2）。

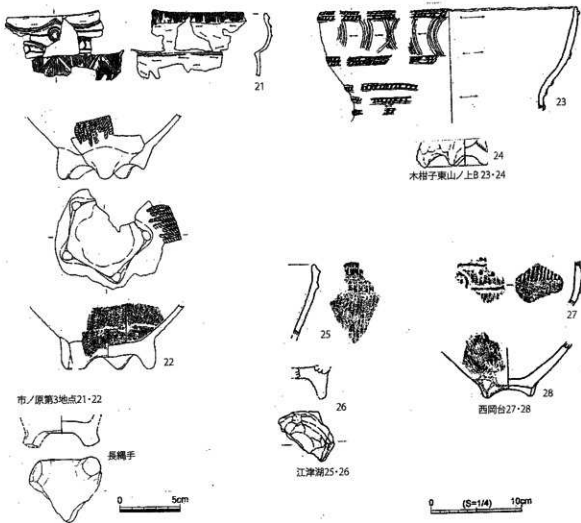
以上によれば、岡山県長瀬手以外は九州内の遺跡であること、多量且つ長期の船元式が出土している里木貝塚に5突起底部が見られないこと等から5突起底部は第3様式の段階におそらく九州で作られた五角形底部の変形版と考えられ（熊本県岡田遺跡では第2様式に連る）、横尾貝塚では船元Ⅱ式段階には瀬戸内よりも九州内との交流を強くしていたと考えられる。

船元式の刻み目突帯は初め薄い粘土紐を貼付け、その後刻みを入れるという手順を踏んでいるが、貼り付けるというのは縄文地に刻むと紋様が鮮明にならないので刻む前段階に粘土紐を貼る必要があると考えたのであろう。次第に粘土紐が厚みを増し、同時に粘土紐を貼り付ける目安の二本線だけで済ます場合が生じたようである。

その過程を示すのが第65図8で、二本沈線→粘土紐貼付→刻み目の順が観察できる。



船元式底部集成図1



船元式底部集成部2

※船元式底部集成部に掲載した遺跡：福岡市今山・福岡県築上部築城町東高塚弘法田・佐賀市東古賀・熊本県杵築市木柑熊本市江津湖・熊本市水源池・熊本県宇土市西岡台貝塚・熊本県天草市大矢・熊本県菊池市木柑子東山ノ上B・鹿児島県日置市市ノ原第3地点・岡山県備前市長縄手

阿高式土器（第75・76図）は器面に二枚貝桑痕を残さず、指先による太い沈線である凹線により口縁部或いは胴部までも幅広い紋様を施すものである。出土した阿高式土器は胎土に滑石を多量混入し光沢があるものが半分、そうでないものが半分の比率であった。

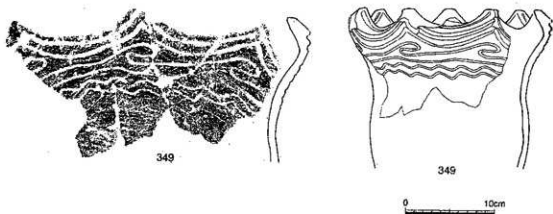
縄文時代後期の土器

後期の土器はほとんど前半に属するものであった。口縁部にいくつか山状に突出させた土器（第94図21・22）は、中期末の北白川C式土器の影響をもつものである。中津式土器の内、J字文（第94図14・第96図1）や口縁上端に平行にある縄文を含み窓枠状の紋様（第93図23・第94図1・4・7・10）のものは中津1式、口縁上端の縄文を失い（第95図8）、二段の渦巻き文をもつもの（第93図3）はII式であり、ある程度の年代幅のある土器がみられる。第113図の沈線文土器は口縁上部の列点を除けば中津式土器に近い。中津式に後続する福田K II式（第102図12・20、第101図25）、北久根山式や片粕式頃の土器（第101図18、第102図18）が少量ある。

第105図の土器は以上のどれかに伴うものであろう。

横尾貝塚出土の第108図は型式名のない土器である。岡山県長繩手遺跡で1点（深鉢6類349）類似点のある土器が見られる。同遺跡土器は中期末の古段階（北白川C式3期）、新段階（北白川C式4期）に分けられた中の古段階とされているので第108図例は中期末か？ 但し、349は土壇4出土であり、他の古段階の遺物は共存していない（福本 明 2005「長繩手遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告189 岡山県教育委員会）。第108図は波状口縁をなすことや口縁部紋様が頂部を中心に展開する点は、中津式土器の一部に類似し、大分県を中心に分布する後期前葉のコウゴー松式が波状口縁である点と沈線文の一部が類似することなどコウゴー松式とも関係があると考えられる。第102図2は同一に列点の位置が類似するが、口縁上端が内湾することや口縁部部の狭い紋様の存在から第108図に似ている。

横尾貝塚では後期前葉の西和田式土器が多数みられる。西九州・中九州の中期後葉土器である阿高式の系譜に連なるとされている。内面に二枚貝条痕がなく、指先による紋様をもった第79図の土器は西和田式でも古い頃のものであろう。施文を指先で行う凹線の土器と別のもので行う沈線文とが出土しているが、横尾貝塚で



長繩手遺跡土器

は凹線が主体を占めている。西和田式に類似し口縁部に刻み目突帯をもつ土器は従来の西和田式には少ないが、横澤慈によれば「西和田式に後続すると考えられるのが沈線文土器と口縁部を肥厚又は隆帯を施し、下位に沈線文を施すものである。沈線文は西和田式の凹線が細く沈線化したもので、モチーフは西和田式と同様のものもあれば、中津式的な文様モチーフで縄文を欠くものや、3本沈線で福田KⅡ式的なものもある。口縁部形状では波状口縁も多数認められ、ここにも中津式の影響を見ることができる。隆帯+沈線文七器も同様で、西和田式的な文様モチーフから沈線文幅幅が狭く斜位、菱形の文様が展開するものもある。後者はコウゴー松式や綾式と文様が類似しており、コウゴー松式も口縁下に刻目隆帯を施すものがあることから、極めて近い関係にあると言える。また、小池原貝塚では刻目隆帯とその下位に福田KⅡ式的な文様モチーフを施す土器（大分24-1・2）も見られる。以上のことから、これらの七器は中津式後半～福田KⅡ式にかけて存在するものと考えられるが、口縁部の肥厚は中津Ⅱ式にも見られる特徴である。また、口縁部形状の類似から、山口県を中心に分布するとされる墨敷式との関係も注意する必要があるだろう。」（横澤慈 2011「大分県における中津式・福田KⅡ式土器併行期の概要」『九州における縄文時代後期前葉の土器—中津式・福田KⅡ式を中心として—』）とされ、コウゴー松式との関係が指摘されている。

横尾貝塚では縄崎式系統の上器もかなり出土している（第103図・104図）。縄崎式は口縁部が極端に肥厚、屈曲するのに対し横尾貝塚では口縁部の肥厚が少ないものが多い。口縁部紋様は半円形弧線を複数向き合うものに口縁部肥厚が少ない傾向がある。胴部は紋様帯が広い。後期前葉から中頃の小池原上層式である。

第110図の土器は山形の波状口縁で口縁外面には帯状の肥厚部があり刻み目を付けたものが多い。頸部・胴部には沈線で区画された内部を中心に列点が入れられており、コウゴ-松式土器である。

他に少数であるが三万田式土器（第119図1～3）、晩期中頃の土器（第119図4・5）、晩期後葉の無刻み目突唇文土器、晩期末あるいは弥生早期の刻み目突唇文土器（第119図）6～8・11）が出土している。

埋葬人骨について

横尾貝塚では合計17体の人骨が出土した。このうち、単体で埋葬されていたのは3号・5号・6号・10号の4体であり、他は結果的に一箇所に改葬人骨を複数回埋葬した状態のものであった。埋葬人骨には魚骨製装飾品の他、副葬品がなかったののでそれ自体で年代を推定できなかった。6号埋葬人骨は貝層の一部覆う状態から貝層形成過程での埋葬とも考えられる。10号・11号は貝層上部から掘り込まれたことが明らかな検出状態であった。2号～9号は重複して出土したが埋土内に貝層が認められたので貝層形成中の埋葬と考えられる。出土した5体については放射性炭素年代測定を行ったので前述のように以下の結果が得られている。

4683 ± 35BP（2号人骨）・4371 ± 36BP（6号人骨）・4675 ± 35BP（7号人骨）・4759 ± 37BP（8号人骨）・4406 ± 36BP（10号人骨）

出土状態から貝層よりも後の埋葬と考えられた10号人骨は4406 ± 36BPであるのに対し、貝層形成中と考えた6号人骨は4371 ± 36BPはやや新しい年代を示すので、出土状態から6号は貝層分布域の周縁にあり、一部だけ重複していたので貝層形成中とみただけの可能性はある。

以上の結果、単体埋葬であり、かつ改葬ではない4号・6号・10号・11号人骨は前期・中期に形成された貝層よりも新しい時期と考えられ、一方、改葬墓である2号・7～9号人骨は貝層形成過程での埋葬であると考えられる。改葬墓は一度どこかで埋葬した人骨を取り出し、改めて葬る型式の葬法である。縄文早期には大分県二日市洞穴・長崎県岩下洞穴があり、前期には佐賀県架畑遺跡、後期では大分県粉洞穴に見られるが普遍的ではなく、九州内では非改葬例の方が多いという（坂本嘉弘1997『九州における縄文時代の葬制』『古文化談叢』第37集 九州古文化研究会）。

炭素年代測定値に関連して

貝層貝殻8点の放射性炭素年代測定値は、4851 ± 25BP～5076 ± 22BPに集中する資料1～6と5798BP ± 24・5832BP ± 24の資料7・8の二つに分かれた。BPとは炭素年代測定法が始まった1950年から何年前か、という意味である。これらの年代をどう理解すればよいか考えてみる。

前者の年代は船元Ⅰ式からⅡ式を主体とする短期間に形成された滋賀県栗津湖底遺跡第3貝塚の測定値に近い。同貝塚では4090 ± 70年前から5080 ± 80年前までの範囲に収まる19点の測定がなされており、最多は4600年代の3点、次ぐのは4900年代の2点であり船元式の年代を考える参考資料となる（中村1997）。横尾貝塚では前期初頭の鷹島式から前半・中葉の船元式が多く見られ、土器型式では栗津遺跡第3貝塚の時期を含んでいる。横尾貝塚では大分県教育委員会が調査した後、範囲確認調査が繰り返され、報告書が2008年度に刊行されている。その中で今回報告する調査で出土した埋葬人骨について放射性炭素年代測定等が行われ、以下の結果が示されている（大森・中村2008）。4683 ± 35BP（2号人骨 YKS-2）、4371 ± 36BP（6号人骨 YKS-6）、4675 ± 35BP（7号人骨 YKS-7）、4759 ± 37BP（8号人骨 YKS-8a・b）、4406 ± 36BP（10号人骨 YKS-10）。6号人骨・10号人骨には海洋食資源の利用傾向が顕著に表れ、2号・7号・8a・b人骨には摂取した食物重量で約8割程度が植物起源であり、陸上動物をタンパク源とした割合が約3割程度、海産性食資源のタンパク質含有率は約2割程度であった。人骨の示す年代は栗津における船元式土器の年代に収まるものであり、人骨は船元式の時期に埋葬されたと考えられる。

横尾貝塚で得られた貝殻による14C年代値5798BP ± 24・5832BP ± 24に近い測定値としては、関東地方の

前後半の土器型式である諸磯b式が5950～5750年前頃、諸磯c式は5750～5600年前頃であるという（小林2007）。横尾貝塚で得られた年代はどちらかと言えば諸磯b式に近い値であるが土器の年代的位置づけでいえば、横尾貝塚で貝層の形成が始まった藁（3・4・5）式土器は前期前半の型式である。

貝層の形成と海面変動について

横尾周辺での沖積平野の形成史を竹村憲二氏が次のように述べている。18,000年前頃の最終氷期には気温が低下しており地球上の水分は氷となって大陸に被さっていた。海面は現在よりも120m程度低く、横尾周辺の沖積層を削いで現れる谷地形基底は大野川河口域で現海面下70～80mほどにあり、中戸次辺りでは海拔0m程度である。その後徐々に進行した温暖化に伴い海面が上昇すると共に内湾性の粘土層の堆積が進み、以前の谷地形の中に内湾環境が出現した。最大海進時（最も暖かかった約7,000年前の縄文時代前期初頭頃）には縄文海進という海面が現在よりも2mほど高い状況が現れた）には少なくとも横尾貝塚付近まで海域となり、厚い沖積粘土層が堆積した（竹村2008）。

〈前期〉

横尾貝塚では5D区で顕著であるように約7,300年前のアカホヤ火山灰層よりも上に位置する前期の藁3式・4式・5式の時期に貝層が初めて形成され、それはヤマトシジミ主体でマシジミ・マガキが少量伴う。この層の広がりには調査が限定的なものであったため大部分は現地に残されている。ヤマトシジミは海水と川の水が入り交じる河口のような汽水域に生息する貝であり、マガキは潮の満ち引きで海底が現れたり沈んだりするようなやや塩分の少ない内湾の岩礁に固着する貝である。また、マシジミは河川の中流域から上流域の淡水に生息する種類である。このように遺跡周辺で採集可能な貝はヤマトシジミを主とし、マシジミ・マガキが少量伴う状態であることから縄文時代前期当時、貝塚周辺は河口域から中流域にかかるような環境にあったとみられる。5D区貝層上部のヤマトシジミの放射性炭素年代測定値は前述のように5798±24BP・5832±24BPである。

貝層が形成された横尾貝塚は、前期前半になって初めて付近で貝類の採集が可能になったとみられる。

〈中期〉

年代測定した貝殻8点のうち6点は4851±25BP～5076±22BPに集中するものであった。中期前半頃に相当する年代である。5D区貝層を典型的な前期貝層とすれば中期に該当する年代の出た他の場所とどう違うのか見ておきたい。

厚さ5cmずつで集成した貝類分布状況を見ると、7B区・8B区・9C区において貝層の上部にハマグリが多く、下部にヤマトシジミが多いという傾向がうかがえる。ハマグリは多少淡水の流入する内湾の砂泥底に生息する貝であり、アサリやシオフキが生息する砂泥底よりも深い海に分布する。ハマグリは河口など淡水の影響がやや強い汽水域の干潟に生息する。従って、貝層の上部では前期に比べ河口が後退し、貝塚の場所よりも内陸側に海岸線が移動していたと考えられる。ハマグリの出現の意味するものは、前期よりも中期前半の方が海面が上昇していたと考えるべきか、貝の採集場所が単に違ったということかは分からないが、地域的な海面の変動を示す事例と考えたい。

【引用文献】

- 中村俊夫1997……………『滋賀県津浦底遺跡の第3貝塚から出土した木片、骨、シジミ貝の加速器質量分析法による放射性炭素年代』『津浦底遺跡第3貝塚』財団法人滋賀県文化財保護協会
- 大森貴之・中村俊夫2008……………『横尾貝塚遺跡出土人骨による14C年代測定と食料解析』『横尾貝塚』大分市埋蔵文化財発掘調査報告第83集 大分市教育委員会
- 竹村憲二2008……………『横尾貝塚周辺の地質と地形、および横尾貝塚立地との関連』同上
- 小林謙一2007……………『縄文時代前半期の実年代』『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集

詳細な形式の例(任意)	船元1式1級	船元1式1級	船元2式	船元3式	船元4式	船元5式	船元6式	船元7式	船元8式	船元9式	船元10式	船元11式	船元12式	船元13式	船元14式	船元15式	船元16式	船元17式	船元18式	船元19式	船元20式	船元21式	船元22式	船元23式	船元24式	船元25式	船元26式	船元27式	船元28式	船元29式	船元30式	船元31式	船元32式	船元33式	船元34式	船元35式	船元36式	船元37式	船元38式	船元39式	船元40式	船元41式	船元42式	船元43式	船元44式	船元45式	船元46式	船元47式	船元48式	船元49式	船元50式	船元51式	船元52式	船元53式	船元54式	船元55式	船元56式	船元57式	船元58式	船元59式	船元60式	船元61式	船元62式	船元63式	船元64式	船元65式	船元66式	船元67式	船元68式	船元69式	船元70式	船元71式	船元72式	船元73式	船元74式	船元75式	船元76式	船元77式	船元78式	船元79式	船元80式	船元81式	船元82式	船元83式	船元84式	船元85式	船元86式	船元87式	船元88式	船元89式	船元90式	船元91式	船元92式	船元93式	船元94式	船元95式	船元96式	船元97式	船元98式	船元99式	船元100式
船元1式1級	船元1式1級	船元1式1級	船元2式	船元3式	船元4式	船元5式	船元6式	船元7式	船元8式	船元9式	船元10式	船元11式	船元12式	船元13式	船元14式	船元15式	船元16式	船元17式	船元18式	船元19式	船元20式	船元21式	船元22式	船元23式	船元24式	船元25式	船元26式	船元27式	船元28式	船元29式	船元30式	船元31式	船元32式	船元33式	船元34式	船元35式	船元36式	船元37式	船元38式	船元39式	船元40式	船元41式	船元42式	船元43式	船元44式	船元45式	船元46式	船元47式	船元48式	船元49式	船元50式	船元51式	船元52式	船元53式	船元54式	船元55式	船元56式	船元57式	船元58式	船元59式	船元60式	船元61式	船元62式	船元63式	船元64式	船元65式	船元66式	船元67式	船元68式	船元69式	船元70式	船元71式	船元72式	船元73式	船元74式	船元75式	船元76式	船元77式	船元78式	船元79式	船元80式	船元81式	船元82式	船元83式	船元84式	船元85式	船元86式	船元87式	船元88式	船元89式	船元90式	船元91式	船元92式	船元93式	船元94式	船元95式	船元96式	船元97式	船元98式	船元99式	船元100式
船元1式1級	船元1式1級	船元1式1級	船元2式	船元3式	船元4式	船元5式	船元6式	船元7式	船元8式	船元9式	船元10式	船元11式	船元12式	船元13式	船元14式	船元15式	船元16式	船元17式	船元18式	船元19式	船元20式	船元21式	船元22式	船元23式	船元24式	船元25式	船元26式	船元27式	船元28式	船元29式	船元30式	船元31式	船元32式	船元33式	船元34式	船元35式	船元36式	船元37式	船元38式	船元39式	船元40式	船元41式	船元42式	船元43式	船元44式	船元45式	船元46式	船元47式	船元48式	船元49式	船元50式	船元51式	船元52式	船元53式	船元54式	船元55式	船元56式	船元57式	船元58式	船元59式	船元60式	船元61式	船元62式	船元63式	船元64式	船元65式	船元66式	船元67式	船元68式	船元69式	船元70式	船元71式	船元72式	船元73式	船元74式	船元75式	船元76式	船元77式	船元78式	船元79式	船元80式	船元81式	船元82式	船元83式	船元84式	船元85式	船元86式	船元87式	船元88式	船元89式	船元90式	船元91式	船元92式	船元93式	船元94式	船元95式	船元96式	船元97式	船元98式	船元99式	船元100式

上記の表以上に、九州商船研究会2019年の調査時代中期を考える(2019年九州商船研究会 舟運大会発表資料集)により、一時的な番号変更を多くして作成した。

以下の記述は泉による。

京都版玉の大藏山式の多角形面の系譜

	書 体	口 縁 面	具 形
第1様式	キャリバー形の口縁部、扇面内部に彫。	扇状突起のつくりがめだつ。	五角形断面
第2様式 a・b			やや上げ蓋
第3様式 a	扇面がならぬが、		扇状
第3様式 b	口縁部と扇部の造りが区別できない。		
第4様式			
第5様式 a	扇形断面の出現に伴って、ふたたび口縁部がキャリバー形を呈する一知特例と第2様式の形像。		
第5様式 b			
第6様式			

系 譜 年	簡 説 示	
第1様式	扇面上部に扇形断面や八角断面を2列めぐらす。【扇面式・扇元1式5型】	
第2様式	円形断面文出現。【扇元1式A型】	扇元1式4型
a 型	八角文列をめぐらし上下に円形断面文を施すものあり。	
b 型	C字円断面文が1字形断面文に変化。円形断面文多用、兼持形も。	
第3様式	逆部文・二角形文多用。骨のぬい・併骨。特に逆骨現象が特徴。	扇元1式は扇形が偏かにくびれる。
a 型	円形断面文。八角文や1字形断面文はなし。	
b 型	円形と三角形の組み合わせ文像。	
第4様式	半載竹管による平行比断面を特徴とする。漢文地に平行比線だけが逆部文を強く閉式。二角形断面文の出現で併骨と平行比線により三角形を基本とする断面を継ぎ、口縁部と断面を併骨によって区別するもの。(二角形文と逆部文の組み合わせを平行比線で表現したもの)とがある。	扇元1式は半載竹管を特徴とする。
第5様式	キャリバー形の口縁部で、扇形断面をもつ。地文は逆部断面ないし逆部文であり、断面はない。	
a 型	口縁下に半載竹管による逆部文でその下に逆部文のもの、口縁部に扇形断面文A型を施すものがある。	扇元1式・漢文の後は交互に扇面
b 型	口縁下の逆部文は併骨化したり交互断面による逆部式に変化し、扇形断面も1層に変わる。地文は逆部文だけとなる。	逆部文を地文とし、半載竹管の式縁部・基本1式
第6様式	地文が扇面状に変化した基本1式と口縁部に円形断面文を強く十字をまとめた。	基本1式(円形断面地文)

※ 泉 所頁1994「扇元・五木式土器断片」『陶文土器大観』3 小学館



試掘調査



南から：試掘時



試掘



左は65'トレンチ



表層除去段階



東側トレンチ



表層除去段階の墳丘状盛り



盛土を除去した縄文時代包含層上面



集石遺構



1号土坑



3号土坑



縄文住居と2号土坑



2号土坑



具層出土状況 (南から)



5号人骨



2号人骨



6号人骨



10号人骨



8a号人骨



7号人骨



7~9号人骨検出初期段階



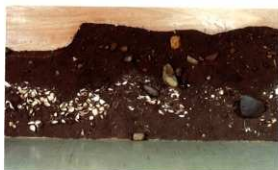
5D区アカホヤ火山灰上位のヤマトシジミ(縄式土器)貝層



貝層採り上げ状況



調査指導 (手前から) 賀川光夫・後藤宗俊・清水宗昭・高橋

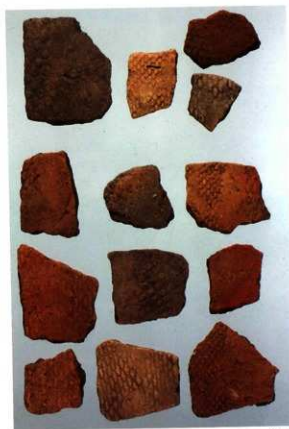


貝層を中心に對取ったもの



断面剥ぎ取り風景





精円押型文土器



山形押型文土器



46-6



47-1



48-5



48-10



48-13



48-14



59-3



48-9



51-1



56-1



59-1



52-1



52-1



59-4



49-1



49-2



57-1



57-3



57-5



57-6



57-9



57-7



57-10



57-14



57-25



57-19



57-28



57-29



57-32



57-33



57-35



58-1



58-3



58-6



58-9



58-11



58-14



58-12



58-16



58-13



58-18



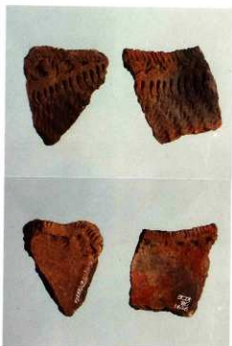
63-1



63-2



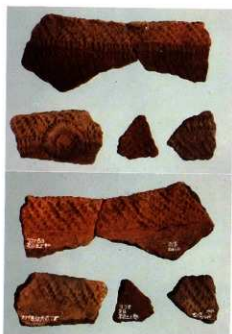
63-3



63-7



63-9



63-11



63-13



64-3



63-22



64-10



65-4



64-6



65-7



65-13



65-18



66-13



67-1



67-1



68-5



68-5



74-1



74-2



74-7



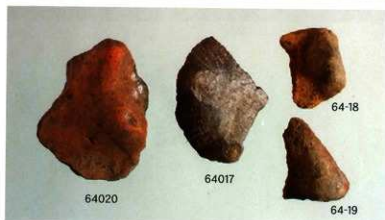
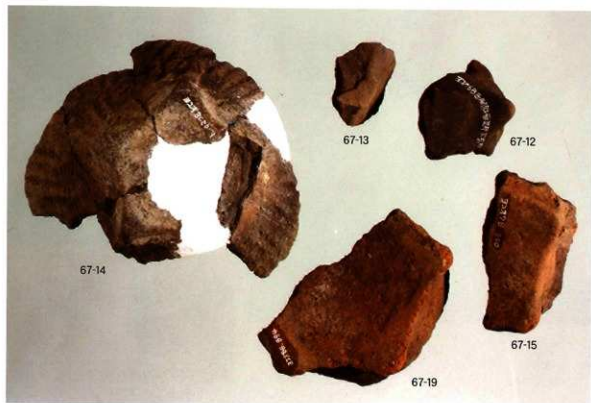
65-8



67-9



65-17



船元式土器の突起底部



93-3

93-5

93-21



93-23

94-3

94-10

94-21

94-25



94-26

95-4

95-8

95-15

95-20



95-27

96-8

97-3

97-5

97-19



100-1



109-22

109-24



80-5



81-10



90-7



76-2



81-15



82-15



83-4



79-1



83-12



85-20



92-5



92-29



93-1



89-1



106-11



107-7



109-4



115-2



103-6



103-24



103-9



103-25



102



105-1



80-1



80-1



95-26



89-5



102-17



102-18



109-1



86-1



109-14



110-1



108-1



110-3



110-4



110-7



110-8



111



111-4



110-12



113-1



110-15



磨製石斧



有溝石錘



結晶片岩製石器



石錘





石錘



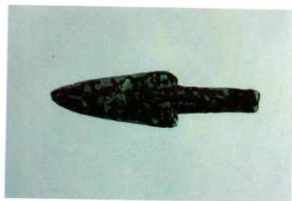
石錘



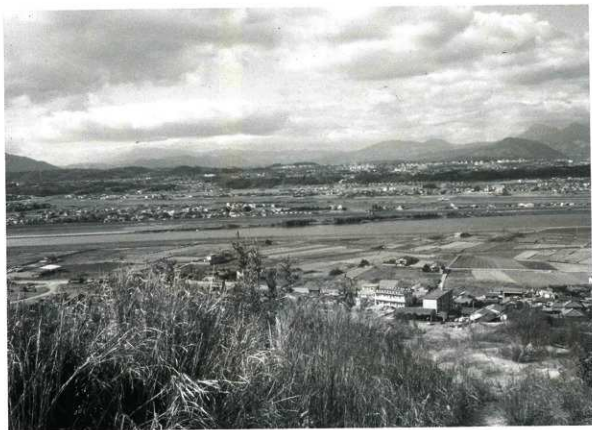
骨製品



鹿角製品



青銅製鏃



東方から見た横尾貝塚周辺の遠景



左は地表面の樹木伐採後の状態。右は礫層除去状況。



65年トレンチ跡（断面左部）



II層（礫層）下位の石積み遺構



II層（礫層）下位の石積み遺構



東部



東部水田との境界付近調査状況



北部トレンチ調査状況



東部



礎層除去後の面



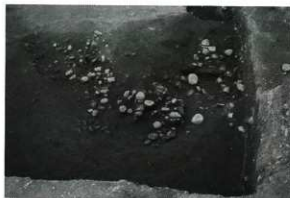
礎層除去後の面



獸骨出土状況



3号土坑(手前)



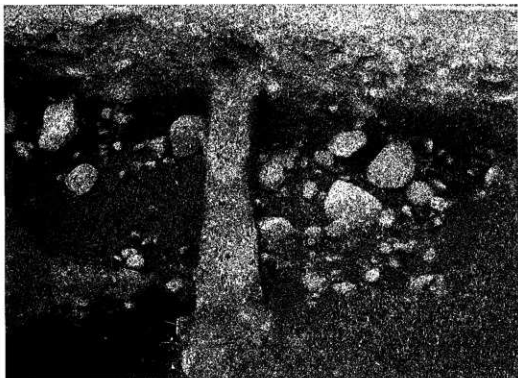
遺状遺構



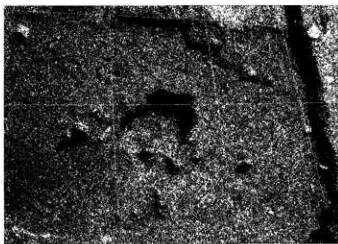
骨角器出土状態



3号集石



縄文後期住居跡



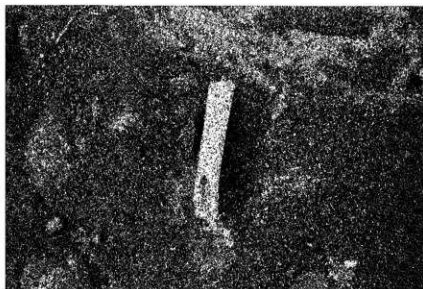
1号土坑



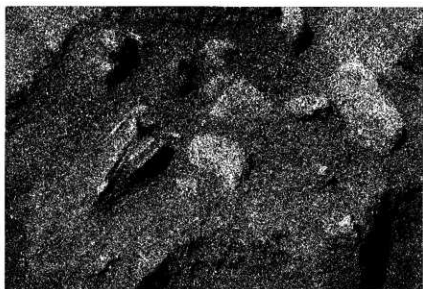
3号土坑



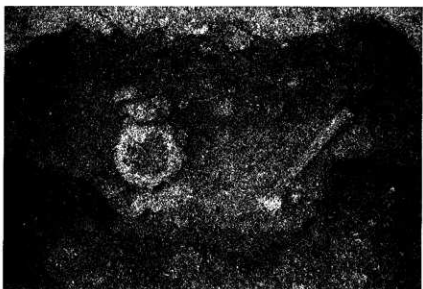
石鋪出土状況



11号人骨



5号人骨



4号人骨



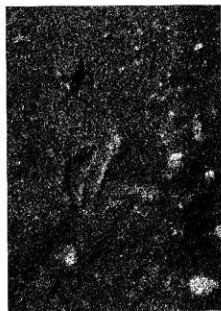
3号人骨



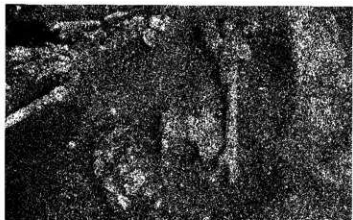
3号人骨



3号人骨

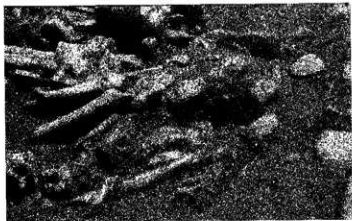


3号人骨



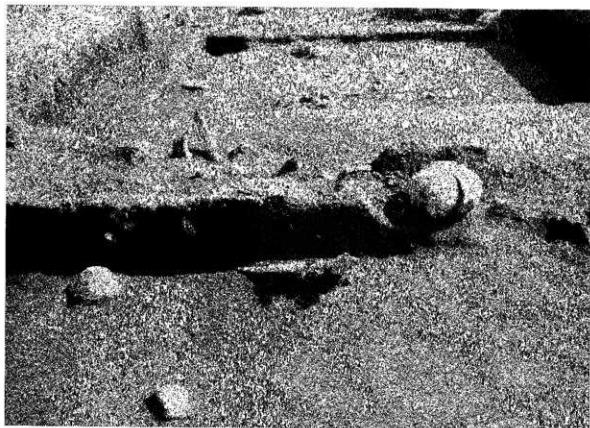
7~9号人骨接近写真1





7~9号人骨接近写真2





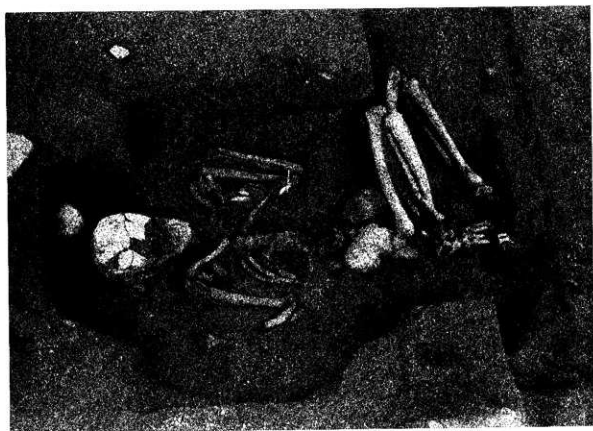
10 号人骨発出状況



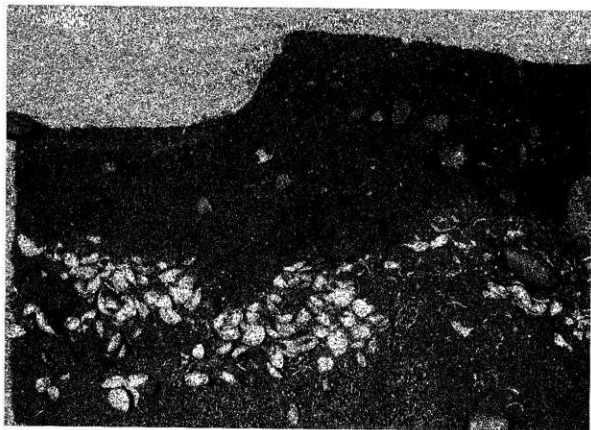
10 号人骨と土層・貝層



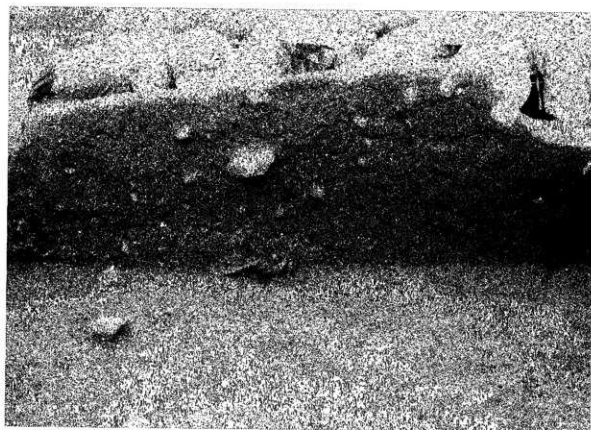
7~9号人骨·2号土坑



6号人骨



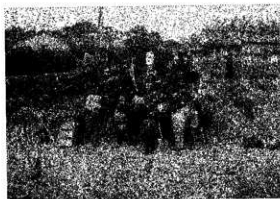
剥ぎ取った断面



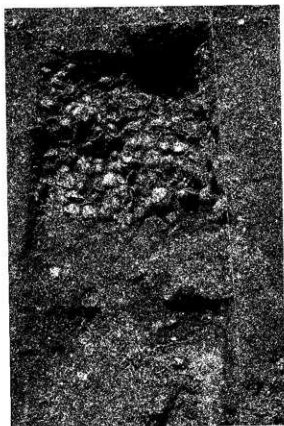
剥ぎ取りをした断面



貝層検出状況



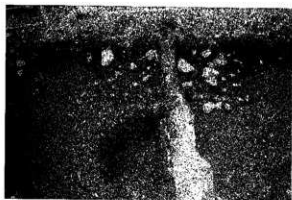
現地説明会の状況



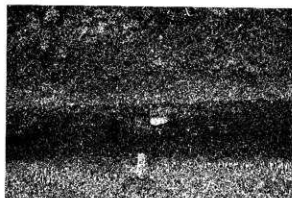
5D区前期のヤマトシジミ貝層



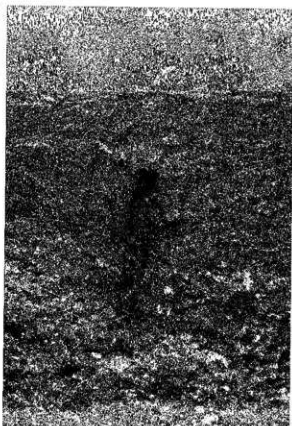
発掘風景



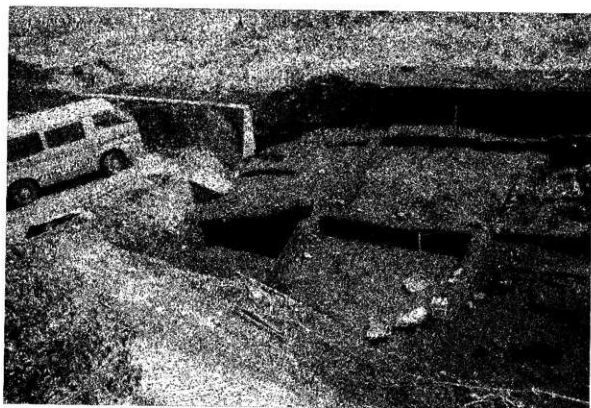
縄文後期住居跡と2号土坑



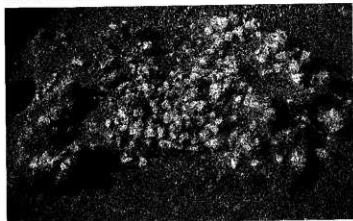
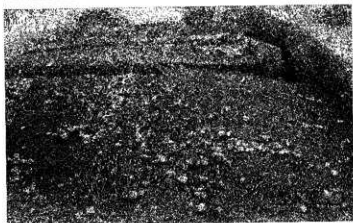
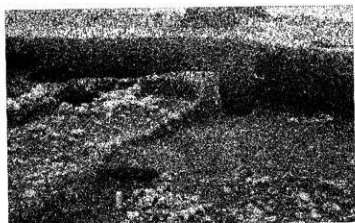
東部トレンチと水田坑



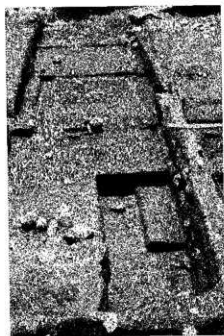
水田坑拡大



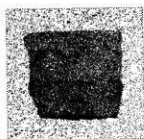
調査終末段階の道路と遺構面の関係



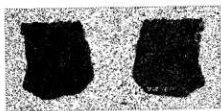
上4枚：65年トレンチと織文遺構面



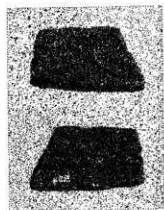
10号人骨周辺



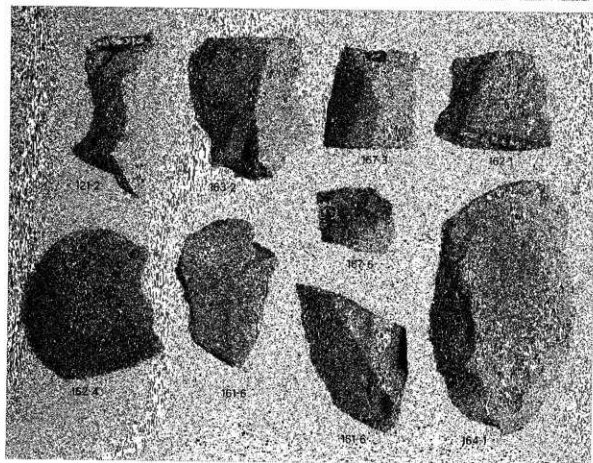
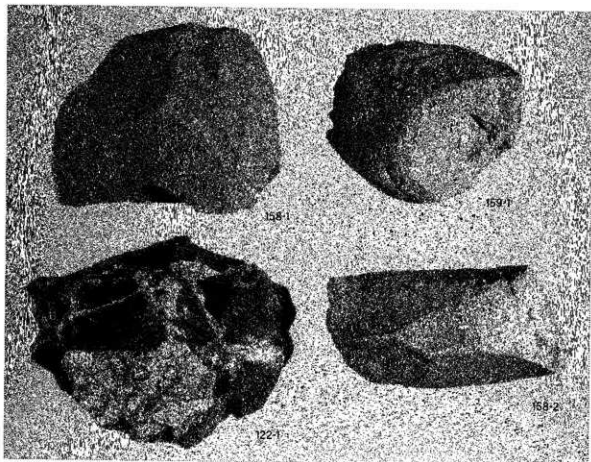
114-30



70-2



71-3



報告書抄録

ふりがな	よこおかいづかはつくつちょうさほうこくしよ
書名	横尾貝塚発掘調査報告書
	県道鶴崎大南線道路改良工事に伴う発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第58集
編著者名	高橋信武・西本豊弘・小池裕子
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中割田1977
発行年月日	2012年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
横尾貝塚	大分市大字 横尾字江又	44201	322163	33° 12' 01"	133° 40' 47"	19801110 ～ 19810625	約260㎡	県道改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横尾貝塚	貝塚	縄文時代	竪穴住居跡 貝層・埋葬17体・土坑	押型文土器・竊式・管細式・ 列点文土器・大畚山式・鷹島 式・船元式・阿高式・西和田 式・中津式・小池原上層式・ コウゴー松式・福田KⅡ式・ 魚骨製装飾品	
		古墳時代 弥生～古代?	竪穴住居跡	鹿角製楽器?	

要約	昭和55・56年度に行った発掘調査の報告書。縄文時代前期(竊式)と中期(船元式)の貝層があり、その上に後期の遺物包含層が堆積していた。埋葬人骨は一次埋葬状態のものと集骨した二次埋葬状態のものがある。
----	---

横尾貝塚

県道鶴崎大南線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24(2012)年3月30日発行

編集・発行者 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田1977番地
TEL097-597-5675

印刷所 良栄堂印刷
